

し、胃全摘例は147例、22.9%にあたり、50~60代に多く、占居部位はC領域を主とし、stage 別では、stage III, IVを合わせると80%に及ぶ。治癒切除率は72%、合併切除例は47例、32%にあたる。胃全摘例の術後成績は、部分切除例と比べて、多少劣る結果が得られたが、同一 stage で比較すれば、各 stage において5生率に差はなく、腸管自動吻合器 EEA の活用により、症例を選んで、より積極的に胃全摘に取りくむ姿勢が必要と考える。

37. 胃の異時性多発癌 2 例

井上育夫、熊谷信夫、笠井妥陵、飯沼克博、
森川不二男 (長野県立須坂)

症例1は早期癌で絶対的治癒切除後10年11カ月で残胃後壁に進行癌を認め、残胃亜全摘・相対的治癒切除だった。症例2はやはり早期癌で絶対的治癒切除後7年8カ月で残胃後壁に進行癌を認めたが、腫瘍切除で絶対的非治癒切除に終わった。異時性多発癌の頻度は少ないが、早期癌の治癒率向上に伴い、第2癌発生の可能性も考慮して厳重な follow up が必要であり、発見したなら積極的治療が望ましい。

38. 安房医師会の胃集検

原 久弥、西川義明、本多 満、野原 宏、
高尾 巖 (安房医師会)
能勢匡夫、宇田川郁夫、増田益功
(安房医師会病院)

安房11市町村40歳以上地域住民8万人を対象とした安房医師会の胃集検は、昭和57年で15年になり、その普及率は51.7%、受診率は17.3%に達している。総合検診を併用して以来年々受診率が上り、平均胃がん発見率は0.20%、早期がん率60%、5年生存率は発見胃がん76%、切除例85%である。

集検受診群は未受診群に比べて胃がん死亡率は15分の1と低く、胃集検の効果が明瞭に現われている。

39. 当施設十年間の大腸癌治療

—その統計的考察—

高橋一昭、藤田昌宏、佐藤英樹
(県がんセンター)
高橋秀禎 (君津中央)

過去10年間ににおける大腸癌症例は257例であり、切除術は233例、90.7%に施行した。近年症例数の増加傾向がみられ、男女ともに60代にピークがあった。腫瘍占居

部位では、直腸癌が多く、形態的にはボールマンⅡ型が66.5%、高分化腺癌が66.1%を占めた。94.4%が固有筋層以下へ浸潤し、リンパ節転移は57.7%に認めた。直腸癌では41.6%に括約筋保存手術を施行した。5生率をみると Stage I は、100%であるが、Stage V では10.5%であった。

40. 大腸悪性腫瘍切除例の検討

石川一郎、香田真一、伊藤文雄、飯田秀治、
滝沢 淳、漆原 徹 (国立習志野)

大腸悪性腫瘍は、消化管において胃に次いで多く、胃悪性腫瘍による死亡率が減少傾向にあるのに対して、食生活の西欧化等に伴ない、その頻度は近年増加する傾向にある。今回、昭和53年より、58年10月迄5年10カ月間の大腸疾患手術例において、大腸悪性腫瘍切除例について検討し、さらに最近経験した興味ある症例、直腸悪性黒色腫・横行結腸平滑筋肉腫・直腸絨毛腺腫が癌化したと思われる直腸癌の3症例を供覧した。

41. 痔疾患に対する術後疼痛対策

—くも膜下腔微量モルヒネ投与法—

更 科 広 実 (筑波大)

痔疾患に対する手術時(サドルブロック)に、0.02mgのモルヒネをくも膜下腔に投与したところ、非投与群に比べ明らかな術後の鎮痛効果が認められた。排尿機能検査として膀胱内圧測定、尿道括約筋筋電図、尿道内圧測定などを行ったが、投与群と非投与群の間に差はみられず、自尿の出るまでの時間でも有意の差を認めなかった。これまで50例に本法を施行してきたが、副作用として頭痛・悪心が1例にみられたのみで、この症例も数日で寛解した。

42. 直腸・肛門管早期癌切除例について

岡 田 光 生 (社会保険中央総合病院)

過去19年間に入院手術した直腸癌472例、肛門癌97例のうち、m 癌10例、sm 癌37例、それに皮膚に局限した基底細胞癌、Paget 病、Bowen 病各1例の計50例の所謂早期癌を経験した。男30例、女20例である。Rb, sm 癌4例に同時性・異期性重複癌各2例がある。

局切23例、Major Surgery 27例を施行した。「年内死亡例」は肛門癌の粘液細胞癌2例、Paget 病1例、Rb 重複癌1例の4例の癌死例と他病死3例であった。